

# 断つて遺れんか續に

## 神風特別攻撃機隊



島の大和心もかぐはしい神風特別攻撃機隊員行勇海軍大尉以下の萬世に燃たる忠烈、その忠烈に我ら一徹奮しく胸打たれ、聲をのみ、頭を垂れたのは、去る十月二十八日十五時、大本營から豊田聯合艦隊司令長官の全軍に對する布告を發表された刹那であつた。越えて三十一日十六時三十分、大本營は二十五日の島隊員の戦果をはじめとして、三十日に至るまでの神風特別攻撃機隊員の、戦果を發表した。

皇國に仇なす敵艦が太平洋にびよどり、華を撃ちてやまざる神風特別攻撃機隊よ、花ならぬを、大君の御稱と惜しみなく散らす若武者よ！



兵行飛等上軍海黒大



長兵行飛軍海峰永



曹兵行飛等一軍海谷



曹兵行飛等一軍海野中

海軍省公表(昭和十九年十月二十八日十五時)神風特別攻撃隊隊員に關し聯合艦隊司令長官は左の通全軍に布告せり

**本 告**

戦團〇〇〇飛行隊隊長 海軍大尉 關 行 男  
 戦團〇〇〇飛行隊副隊長 海軍一等飛行兵曹 中野 登 雄  
 戦團〇〇〇飛行隊副隊長 同 谷 暢 夫  
 戦團〇〇〇飛行隊副隊長 海軍飛行兵長 永 峰 肇  
 戦團〇〇〇飛行隊副隊長 海軍上等飛行兵 大 黒 繁 男  
 神風特別攻撃隊隊員として昭和十九年十月二十五日〇時「スラン」島の〇〇〇度〇〇分に於て中型航空母艦四隻を基幹とする敵艦隊の一隊を捕提するや、必死必中の體當り攻撃を以て航空母艦一隻撃沈、同一隻炎上撃破、巡洋艦一隻轟沈の戦果を収め悠久の大義に殉す。忠烈萬世に傳たり。仍つて茲に其の殊勳を認め全軍に布告す

昭和十九年十月二十八日  
 聯合艦隊司令長官 豊田 副 武

皇國に仇なす敵艦が太平洋にびよどり、華を撃ちてやまざる神風特別攻撃機隊よ、花ならぬを、大君の御稱と惜しみなく散らす若武者よ！

我らは、その姿に「日本人のまごころ」を見る。神代からの「本然の日本人」を知る。「生も死も神のまにまにに大君の御稱となりて仕へまつらむ」眞の日本人の眞現を、目のあたりにするのである。

およそ日本人ならば、一度、皇國の大事に際しては、かへりみすることなく大君の邊にこそ死なむ志を持たぬものとする。まこと、水漬く屍、草むす屍、さては雲霧をなすとも、些かの悔とてないのみか、なほ未だ、忠誠心の足らざるなきやを憂ふるのである。

神風特別攻撃機隊の若武者は、平素の訓練にあつて必死を目指してゐた。そのまよふところ、我が身を必中の彈、魚雷として一機よく一艦を屠り去り、皇國千年の運業を記ぐにあつた。

上御一人、萬歳に真らせ給うての、我ら臣下である。扶桑に死してこそ日本人なのである。そのためには、生死の如きは論外、祈念するところは唯一つなのである。

この心事に於いては、今日まで幾度かの國難に身を投じた數々の「決死隊」諸勇士のそれ

と連続不斷、血の氣を有する。いはゞ神風特別攻撃機隊は、近頃は日清戦争に魚雷を抛いて威嚇海内に突入した水雷艇隊、日露戦争の旅順閉塞隊、さては今次大東亞戦争における特別攻撃隊の諸勇士によつて相傳へ、相承け來つた帝國海軍の傳統、神武御東征以來の大御軍の精神が、鮮然、濃く傳つた精華なのである。

神風特別攻撃機隊員の若武者の心事を訊ねて、我らの胸に強く迫るものは、その自らの戦果を確證できない戰果即戰死といふ事實である。嘗ての「決死隊」諸勇士には、自らの戦果を確證できる機会なしとなつた。だが、神風特別攻撃機隊員の若武者にはその機会は絶対にない。

しかも若武者は欣然と任せてやまぬ。思うてこゝに至れば、我らは、たゞ、機を正して、肅然、眼目するのみ。

想うてもみよ、進發の命令は「死」を宣することである。進發することは既に

數島隊出撃！出撃直前に、機をばらばらつきつ、隊員の手を一人づつしつかと握つて歸す司令一抱くは副長

比島〇〇基地十月二十五日 小野國海軍員目録



に「死」である。命ずるものも、心中無言の裡に、時とところこそは異なるれ、共に死するを誓ひ、命ぜらるゝものも、耳には聞かざれ、その魂の誓ひを知るのぞきければ、到底、冷静平然たり得よう道理はない。

更に、神風特別攻撃機隊員若武者の遺骸を見送る地上勤務員は、その天舞けり去る後姿を地に伏して拜み、司令は松葉杖に身を托して見送り、副長はこけつ、まろびつ、轟かなる雲間に没しゆく英姿を涙しなく追ひかけたといふ。

この心事、胸の裡は、「自分達も必ず敵艦ぞ」の誓ひの響ひでなくてはならぬ。若武者を生ける神々と恐るる心もさきながら、このやうな神風特別攻撃機隊員の若武者を、中心とする機は、唯一つ、「大御軍」の精神の上に打ち立てられる。それは、死するも皇國を護り抜く、國體維持のためには敢へて悠久の大義に生くる日本人のまごころに根ざすものである。

いひかへれば、神風特別攻撃機隊は「日本人のまごころ」に咲いた如き花なのである。その如き花を美しく咲かせ、仇花と散らすまい、その心遣いが神風特別攻撃機隊をめぐる數々なのである。

「日本人のまごころ」——皇國あるを知つて我るを知らず、皇國の大事には我が一切を捧げ盡す忠誠心、これは神代からの日本人の本心であり、この心を當時もつことが、日本人の本來の姿である。

「日本人のまごころ」は皇國の歴史と共に傳へられ傳はるもので、現に我らの五體に脈々と流れてやまぬ血脈の中に存在してゐる。日本の美しい山河とも結晶してゐる。藤田東湖は、これを「天地正大氣」と訓ひ、軍神廣瀨中佐は「誠字」と賦つた。

我らはこの如くかぐはしい花を、美しく咲かせるのみであつてはならない。我らもまた我らの「日本人のまごころ」を、その

神風特別攻撃機隊一覽表

日	機	機	機	機	機
25日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方
26日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方
27日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方
28日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方
29日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方
30日	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方	スラン東方

本營の姿で現はすことに努力せねばならぬ。そしてこの「如き花」を立派に實に結ばせるのだ。

「日本人のまごころ」で敵艦を撃破しよう

そして神風特別攻撃機隊に續くのだ。一徹、足並を揃へて續くのだ。

大本營海軍報道部